

「マダラ」 安定した種苗生産課題

落ち込む漁獲量

マダラは、タラ目・タラ科に属し、新湊市ではマイダラ、魚津市ではイボダラまたはコボダラと呼ばれている。魚偏に雪(鱒)と書くように、旬は冬である。富山県では、子付け(タラの刺し身に湯を通したタラ子をまぶしたもの)、あるいは昆布じめとして食べることが多い。

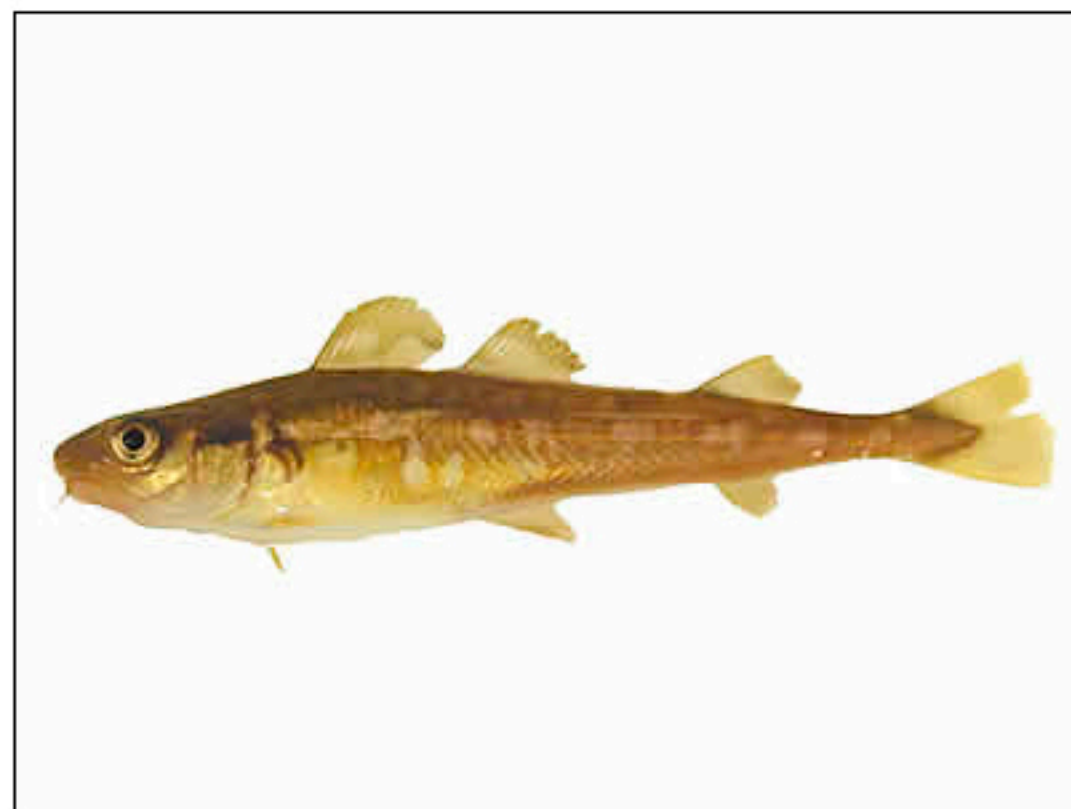
マダラの分布は広く、黄海北部、日本海(山陰以北)、オホーツク海、ベーリング海を経て、カリフォルニア沿岸に至るまでの北太平洋の大陸棚や大陸棚斜面に生息する。近海では、石川県の能登島周辺に産卵場が形成される。産卵期は2月頃で、浅海に來遊して産卵する。稚魚は沿岸で成長し、水温が上昇し始める5月には海底生活に移る。

富山県における近年のマダラの漁獲量は、1990年代に入って、10トン以下の年も出現するなど、これまでに経験したことのないレベルにまで落ち込んでいる。そのため、種苗放流による資源増大が望まれている。

平成7年度から県水産試験場では、日本栽培漁業協会能登島事業場と共同で、深層水を利用した親魚養成に取り組み、ようやく小型水槽での自然産卵が可能となった。平成12年度から本格的に種苗生産を開始し、餌料用の動物プランクトンであるシオミズツボウムシやアルテミア幼生、配合飼料の順に給餌し、3cmの稚魚約1万尾を生産することができた。

シオミズツボウムシ、アルテミア幼生は、マダラ稚魚の成長を促進するための栄養成分を体に蓄えさせてから給餌されているが、稚魚の生残率はなかなか上昇しない。また、ウイルス性神経壊死症という魚に特有の病気が発生して生産中止に追い込まれることもある。現在、10万尾単位の種苗の安定生産をめざし、技術開発に取り組んでいる。

(堀田和夫)



種苗生産されたマダラの稚魚。体長は13cm